

日本留学之味

陈小牧 著



上海交通大学出版社



丨 小牧访谈系列 丨

日本留学之味

50 日本名校 学子访谈录

陈小牧 著



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

内容提要

本书是作者对 50 位在日本名校留学的中国学生的访谈实录。原汁原味,从留学生的角度解读日本教育及文化,市场上同类书籍并不多见。读者可以从中获取留学生在日本学习和生活的第一手资料,包括一些鲜为人知的细节。学子们所披露的升入日本名校的各类经验谈,特别是那些升学“金点子”,具有极强的针对性。而这些则是在学校招生简章和官方网站上无法获取的。从这方面,此书对中国人了解日本大学及日本教育做了一次很好的补充。

作者陈小牧有着日本留学的经历,长期从事国际教育咨询工作,具有优秀的专业素养,熟悉多国教育体制,尤其是日本教育体制。“留学小贴士”,是她在访谈基础上对留学专业内容的提炼,几乎包含当下日本留学的所有热词,读者可在最短的时间内掌握精准的留学专业知识。

除此之外,学子们对日本文化的各种感受为普通人了解日本提供了重要参考,从这方面讲,该书又跨越了专业书的范畴,拓宽了中国人了解日本社会的渠道。本书对学生和家长、留学机构以及教育工作者都有一定的借鉴和参考价值。

图书在版编目(CIP)数据

日本留学之味:日本名校 50 学子访谈录/陈小牧著

—上海:上海交通大学出版社,2017

ISBN 978-7-313-18201-2

I. ①日… II. ①陈… III. ①留学生—访问记—日本

—现代 IV. ①K833.138.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2017)第 242469 号

日本留学之味

——日本名校 50 学子访谈录

著 者:陈小牧

出版发行:上海交通大学出版社

邮政编码:200030

出 版 人:谈 毅

印 制:上海春秋印刷厂

开 本:880 mm×1230 mm 1/32

字 数:258 千字

版 次:2017 年 12 月第 1 版

书 号:ISBN 978-7-313-18201-2/K

定 价:49.80 元

地 址:上海市番禺路 951 号

电 话:021-64071208

经 销:全国新华书店

印 张:11.75

印 次:2017 年 12 月第 1 次印刷

版权所有 侵权必究

告读者:如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话:021-33854186

谨以此书献给我的父母
纪念中日邦交正常化 45 周年



我的父母

感谢父母给了我一个宽松和自由的成长环境。



1. 日本留学时代。
2. 我的保人松尾教授（前排左一）。每年圣诞节他都会邀请留学生们去他家中聚会。
3. 1998年，随笔《蝉——给祖母》在福岡市民艺术节上获最高奖“福岡市民艺术祭奖”，由时任福岡市长桑原敬一亲自颁奖。



每年定期去日本考察，探访在日留学生。

1. 2011年3月，日本遭遇东日本大地震，8月我率上海教育记者团访问日本。
2. 在东北大学访问。
3. 在动漫学校访问。



1. 从2009年开始每年举办日本留学展。
2. 日本留学高端论坛。
3. 接受京都市政府委托，协办京都七大名校留学展(2010年10月)。



1. 每年我会做多场日本留学专题讲座。
2. 为留学生做行前指导。
3. 主持上海留学年会。



$\frac{1}{2}$ $\frac{4}{5}$

十年前开始做“小牧访谈”，迄今为止受访学生已达数百人。

1~5. 与部分受访留学生合影。



1
2 | 3

- 1~2. 受邀参与各类日本教育及留学节目录制。
3. 接受各类媒体专访。



2014年发起日本优质文化公益沙龙“翰飞沙龙”

1. 周恩来日语翻译周斌先生分享专场。
2. 插花专场。
3. 日本医疗专场——走进上海亲和源老人公寓慰问。
4. 日妆专场。

序 一

深耕“留学”十七载

认识小牧已有十数年。

前几天,她打电话给我,希望我为她的新书《日本留学之味》作序。她说感谢这么多年来,协会给予她工作方面的各种支持,让她除了完成本职工作外,还做了许多中日民间公益事业。而我作为上海教育国际交流协会会长,作序便责无旁贷了。

我首先要向她表示衷心的感谢。感谢她多年来为中日民间交流做出的贡献。

初识小牧是在 2000 年,那年她刚从日本学成归国,在一次协会组织的日本院校的招待晚宴上。我当时虽在政府机构工作,但仍兼任协会方面的工作,所以也出席了那次的晚宴。那是我初次见她:人很开朗、大方,有着很好的教养。

这一认识就是 17 年的光景。之后,因工作关系,每年总会在不同的场合见到她,少则一次,多则两三次。这

十余年,除工作之外,她相继完成了恋爱、结婚、生子……之后,我知道她有了自己的工作室,在业界有了一定的知名度。“在恰当的时候,做恰当的事”,这是她给我的感觉。是她努力的结果。

日本作为中国的近邻,由于两国间由来已久问题的存在,关系微妙且敏感,而小牧却能在其间深耕十七载,实属不易。我想没有对这份工作的挚爱和热情,她不可能坚持这么久。

大数据时代,包括留学信息,海量多样,让信息价值降低,这便需要有人能够“把关”,帮助学生和家长去伪存真,披沙拣金。外部环境的变化,对留学从业人员的专业性提出了新的要求。作为“把关人”,我想小牧是胜任的。她除了帮助学生完成赴日留学的梦想,还注重学生的反馈,随访学生,为的是提供更优质的服务,留学行业需要像她这样执着敬业的人。

《日本留学之味》一书选取了 50 位留日学子,采取以学生讲述为主的形式,真人真事,未经加工。看似留学生对自己留学生活片段的叙述,都是琐事,甚至有点琐碎,但从更深层次来看,则引领着我们对中国人自费出国留学做了一次很好的回顾和梳理。学生对日本的一些“细节”叙述,读来真实、感人。每个人基于自身的成长背景、知识结构和经验,对文化的感受不尽相同,但他们对日本文化却有着一些共性的认识:干净、细致、死板、公平、公正。此外,从他们的分享叙述中,我们可以充分感受到在时间长河中,日本留学政策的变迁以及日本社会 and 日本人对待中国留学生态度的转变。概言之,在每个学生的“个人留学记忆”中,我们很容易能够寻找到中国留学大时代的印记。从这点来看,《日本留学之味》具有很重要的意义。

教育全球化,加速了国际学生的流动。联合国教科文组织预

测,世界留学生总人数预计在 2025 年将达到 800 万人。而中国作为世界上最大的留学生输出国,是全世界大学必争之地。教育以脚投票的时代,《日本留学之味》也是对大学卖方市场做了一次很好的补充。

本书看似一本留学专业指导书,但在在我看来,远非如此。书中 50 位年轻学子对日本文化的感受和解读,对普通中国人了解日本和日本文化也具有一定的参考价值。

书的出版恰逢中日邦交正常化 45 周年之际,我想借此机会,期待之后的中日两国能够从多角度,特别是从民间角度开展更加丰富多样的交流活动。

期待小牧能够继续努力,不断精进,更上一层楼,是为序。

姜海山

上海教育国际交流协会会长

2017 年 10 月

「日本留学の味」発刊に寄せて

この度、日本へ留学する学生たちが大変頼りにする陳小牧さんが、日本への留学生たちにインタビューした「日本留学の味」という本を上梓されるということで、その序文を依頼された。今年は日中国交正常化45周年の記念すべき年であり、このような有意義な本が出版されることは、大変素晴らしいことであり喜んで引き受けさせて頂いた。

陳小牧さんはご自分も日本に留学されたご経験をお持ちであるが、帰国後の2006年に「陳小牧工作室」を立ち上げられて、上教の日本部部長として日本へ留学しようとする学生たちの相談相手になり、或いは日本の各地の大学が中国人留学生を募集する際の橋渡しの仕事をされている。仕事の目的は少しでも多くの中国人留学生が日本へ留学して順調に学業が出来るようにサポートすることであり、本来は2008年策定の「留学生30万人計画」を実行中(ちなみに中国は「留学生50万人計画」で間もなく達成する)の日本国政府が行うべき仕事を、無償ボランティアでやられている。その

意味では日本の各大学や日本政府にとってはまことに有難い、恩に着なければならぬ恩人である。逆に私は上海華鐘コンサルタントという会社で、少しでも多くの日本企業に中国に来てもらって、中国で順調に企業活動ができるようにサポートする仕事をしているが、中国政府からお金をもらっていないという点では無償ボランティアであり、その意味では陳小牧さんと私は似た者同士である。

私は昔から子供たちや若者の教育や留学に対して非常に関心があって、中国では既に6ヶ所の華鐘希望小学校を建てて、現在でも毎年多くの貧しい子供たちに奨学金を出しているし、中国に來ている日本人留学生たちにも可能なサポートをしている。当然ながら陳小牧さんの、少しでも多くの中国人留学生に日本へ行って勉学できるようにするお仕事に対しても可能なお手伝いはしてきたし、今後も労を惜しまないつもりである。

昨年 2016 年の日本で学ぶ外国人留学生は日本学生支援機構(JASSO)によれば23.9 万人で、中国人留学生は9.8 万人で約41%を占める。しかし中国教育部の発表では、昨年中国から外国に出た留学生は実に54.5 万人(日本の10 倍以上)で、8 割近くがアメリカとイギリスとその連邦圏に留学しており、日本へ向かう留学生は全体の1 割も居ない。更に日本にとって危機的なのは、アメリカや欧州の各国から中国に來る留学生数は、日本に來る留学生数の10 倍以上であり、インドやアフリカから中国に來る留学生数は、日本に來る留学生数の20 倍、30 倍であることである。私が中国で仕事を始めた1978 年頃から2000 年頃までも、中国人の留学先としてやはり日本が主流で、私自身も何人か